

【要旨】 ニマタンパ・シェーラブジンパ* —その事績と著作について—

西 沢 史 仁

ニマタンパ・シェーラブジンパ (Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pa, 以下、シェーラブジンパ) は、十七世紀に活躍したサンプ寺ニマタン学堂の学僧である。サンプ・ネウトク寺 (gSang phu ne'u thog, 以下、サンプ寺) は、教法後伝期における仏教教学復興の一大拠点となった中央チベットの古刹であるが、後代、サキャ派とゲルク派の多数の講説院 (bshad grwa) を内部に擁するようになった。『黄瑠璃史』(Vaidūrya gser po, 1698年造) には、当時、四つのゲルク派の学堂と七つのサキャ派の学堂とで合計十一の講説院がサンプ寺に存在していたことを伝えており、ニマタン学堂 (Nyi ma thang grwa tshang) はそのうちのゲルク派系の学堂の一つである。

シェーラブジンパの生涯や事績については、その伝記資料を欠くため、詳しいことは知られていない。但し、デプン寺ゴマン学堂の教科書作成者にしてゲルク派最高の学者の一人に数えられるクンケン・ジャムヤンシェーパ (Kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje, 1648-1721) の師の一人として、ジャムヤンシェーパの伝記資料に言及されており、若かりし頃のジャムヤンシェーパに大きな影響を与えた人物であることが知られている。

彼の著作に関しては、幸い、中観学、論理学、般若学に関する彼の八つの著作のウメ書体の写本が大谷大学図書館に所蔵されており、そのうちの最初の中観学と論理学の六作品は既に影印版の形で出版されている。但し、これはクンイク (bskungs/bskung yig) と称される特殊な隠字体で筆記されており、そのことはこれまで彼の一連の著作を近付き難いものとしてきた。しかるに、近年、大谷大学真宗総合研究所のホームページから、この六作品を通常のウチェン書

* 編集委員会注 本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリの以下のURLに掲載。

<http://id.nii.ac.jp/1374/00006343/>

体に直した電子テキストが公表されたことを契機として、これまで殆ど研究がなされてこなかったシェーラブジンパの著作の研究状況が整ってきた。そこで、本稿では、極めて断片的ではあるが、現在知られているシェーラブジンパの事績及び著作に関する情報を収集・整理することを主題として、これをもって今後のシェーラブジンパ研究のための予備的研究とすることを目的とする。

まずシェーラブジンパの事績については、『黄瑠璃史』、ジャムヤンシェーパの『大教義書』(Grub mtha' chen mo)、及び、ジャムヤンシェーパの伝記資料(ジャムヤンシェーパ自身による自伝とクンチョク・ジクメワンポ(dKon mchog 'jigs med dbang po, 1728-1791)による『クンケン伝』の二点)を資料として、以下の一連の事実が明らかとなった。

1. シェーラブジンパは、『黄瑠璃史』所収のニマタン学堂長の系譜では、第28代学堂長ソクポ・シェーラブジンパ(Sog po Shes rab sbyin pa)としてその名を見出すことができる。ここから彼がソクポ、即ち、モンゴル人であることが判明する。
2. シェーラブジンパは、『大教義書』によれば、ジャムヤンシェーパ(1648-1721)が1668年にゴマン学堂に入寺した際の学堂長ルンブム・ロトゥギャンツォ(Klu 'bum Blo gros rgya mtsho, 1635-1688)の三人の筆頭弟子の一人であり、ジャムヤンシェーパの兄弟子に当たる人物である。
3. シェーラブジンパは、当時、五大典籍の中でも特に論理学に通達した学者として知られており、ジャムヤンシェーパは、彼を「正理の主(rigs pa'i dbang phyug)」と称し高く評価していた。
4. シェーラブジンパの正確な年代は不明だが、関連する前後の諸人物の年代から、1645-1715年頃の人物と推定される。
5. ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパに出会ったのは、『クンケン自伝』によれば、1671年、彼が二十四歳の年である。(『クンケン伝』では、1672年。)
6. ジャムヤンシェーパはシェーラブジンパの下で論理学、律、阿毘達磨などを修学したが、特に、『量評釈』について昼夜を分たず深く学び、師事した年月は不定期で短かったものの、ジャムヤンシェーパ自ら「お互いに心が一つになった(phan tshun sems gcig byung)」と

評するほど師弟関係は深いものがあった。

7. ジャムヤンシェーパは、サンプ寺において1672年にカチュ・タコル (dka' bcu grwa skor) を行い、その翌年の1673年に、師にして当時のゴマン学堂長であるロトゥギャンツォの指示に背いてまで、再度サンプ寺でラブジャム・タコル (rab 'byams grwa skor) を行った。その背景には、サンプ寺の師であるシェーラプジンパの指示と学恩に報いる意味合いがあった。

他方、シェーラプジンパの著作については、五点の中観の著作と二点の般若の著作、律と論理学の作品が一点ずつで合計九作品の現存が確認された。そのうち、律と論理学の二作品は木版本がモンゴル国立図書館 (National Library of Mongolia) に所蔵されている他、八点の作品はウメ書体の写本として大谷大学図書館に保管されている。具体的には、以下の通りである。

1. *Nyi ma thang dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i bDen gnyis kyi mtha' dpyod* (ニマタン師シェーラプジンパにより著作された二諦精解) [Ota 13949: Ca. 1-15b4]
2. *Nyi thang dBu ma'i tshad 'gog [gi mtha' dpyod]* (ニタン中観量否定 [精解]) [Ota 13950: Ca. 1-24b4]
3. *Nyi ma thang bla ma Shes rab sbyin pa'i Chu 'bab kyis mtha' dpyod* (ニマタン上師シェーラプジンパの水流精解) [Ota 13951: Ca. 1-13a4]
4. *Nyi ma thang dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i dBu ma dus gsum rnam gzhag gi mtha' dpyod* (ニマタン師シェーラプジンパにより著作された中観三時設定精解) [Ota 13952: Ca. 1-16b8]
5. *Nyi ma thang pa dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i dBu ma bdag 'gog gi mtha' dpyod* (ニマタン師シェーラプジンパにより著作された中観我否定精解) [Ota 13953: Ca. 1-26a3]
6. *Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pas mdzad pa'i gZhan sel gyi mtha' dpyod* (ニマタンパ・シェーラプジンパにより著作された他者排除精解) [Ota 13954: 1-10a8]
7. *Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pas mdzad pa'i Phar phyin skabs don po'i bka' bstan bcos yan gyi mtha' dpyod* (ニマタンパ・シェーラ

プジンバにより著作された般若第一章「仏言・論書」までの精解) [Ota 13956(1): Tha. 1-41a1]

8. *Nyi ma thang pa'i Don bdun cu'i skabs gnyis pa gsum pa bzhi pa lnga pa rnams* (ニマタンバの七十義の第二章・第三章・第四章・第五章)
[Ota 13956(2): Tha. 1-19a6]

これとは別に、モンゴル国立図書館には、以下の二点の木版本の著作が所蔵されていることが新たに判明した。

1. *Lung dang rig[s] pa'i gter chen po legs par bshad pa'i dus tshigs gsal bar byed pa'i nyi ma zhes bya ba bzhugs so*. 目録番号: M0054824-017. 1a-50a (7行). 54.0x7.0 cm.
2. *Kun mkhyen nyi ma thang ba shes rab sbyin pa'i zhal snga nas kyis mdzad pa'i gzhan sel gyi dpe tshig bzhugs so*. 目録番号: M0055839-027. 1a-28a (6行). 46.0x7.0 cm.

このうち、後者の他者排除論(アポーハ論)の作品は、上記大谷写本の第六番目の作品と同一テキストであること、さらには、『量評釈』の一学課としての他者排除論ではなく、ドゥタ文献の一学課としての他者排除論のテキストであることが判明した。他方、前者の律の作品については、在印デプン寺ゴマン学堂図書館から活字本として出版されているが、その奥書から、モンゴル国立図書館所蔵本とは同系統の異なる版本に基づくものであることが確認された。

シェーラブジンバの著作を研究する意義としては、種々の研究の視座を立てることが可能であるが、以下の二点が特に重要と思われる。

1. ジャムヤンシェーパの教学形成を解明する上での重要性。
2. 最後期のサンブ教学の一形態を示す資料としての重要性。

シェーラブジンバがモンゴル人であり、実際、彼の律と論理学の著作がモンゴル国立図書館に残されていたことから、他にも彼の一連の著作がモンゴルに保存されている可能性がある。今後、その方面の調査が必要になることを最後に付言しておきたい。

* 本稿は、JSPS 科研費 JP15K02046の助成に基づく。